学校をつくろう!通信

がっこう・N.P.O.
珊瑚舎スコーレ
第132号

学校の役割　　その　１１１

珊瑚舎スコーレは沖縄県から委託を受けて学習塾を運営しています。貧困対策の一つである、所謂無料塾と呼ばれている学び場です。ある塾生が「変な塾」と笑顔で言ったそうですが、日々の様々な場面で一般の学習塾との違いを感じていると思います。豊かな心根をもって日々を生きる自分に出会えることが貧しさを克服するための必要条件と考えていますから、そのような考えを反映したカリキュラムと時間割、またスタッフや講師の活動があります。

「ウチナーロ」の授業があるのもそのうちの一つです。ウチナーロを担当していた講師の方が、都合がつかなくなり、おやめになりました。ところが、代わりに講師を引き受けて下さる方が見つかりません。僕が引き受けることにしました。英語をあまり知らない教員がピンチヒッターで英語を担当するようなことになったわけです。市場でオバァ達のユンタクに混ぜてもらったり、民謡スナックのカラオケで沖縄民謡を歌ったり、琉歌大成などを枕に居眠りしたことくらいしかウチナーロに接したことはありません。そんな僕が授業をするのは「ウチナーロっていいな、大切にしたいな」と彼らに思ってもらえるような時間を作りたいからです。これは僕の授業だけに限ったことではなく、すべての授業を担当する講師の方々にお願いしていることです。

ウチナーロの授業の生徒作品などを紹介します。中学１，２年生合同クラスです。塾生が現在、自分達が使っている言葉で琉歌の８・８・８・６、４句３０音の歌を詠みます。青春３部作、「恋心を詠む」，「友情を詠む」、「沖縄(故郷)を詠む」です。青春にはちょっと早い学年ですが、背伸びしたい気持ちをくすぐって「青春３部作」と銘打ち、３首作りました。もちろん何首も作る生徒もいます。彼らが詠んだ歌にタケちゃんという謎の人物がウチナーロに訳してくれます。カタカナでルビを振ってくれますが、正確な発音ではありません。それをさらにカタコトの僕が詠み、生徒にも何度も詠んでもらいます。「ウチナーロ、カッコイイ」だそうです。自作品を含め、気に入った作品を、ここでは紹介できませんが「琉歌で琉画」と名付けて４コマの絵にもしてもらっています。４コマ漫画のように琉歌も４句を起承転結で構成するとメリハリの利いた言葉の世界が生まれることを知ってもらおうと思っています。青春３部作からそれぞれ１首ずつ紹介します。

☆生徒作品　恋心を詠む

うつくしい海に　うつくしい空に
うつくしい彼氏　とてもいいね

タケちゃん訳

海見ても美らさ　空見ても美らさ
（ウミンチンチュラサ　スランチンチュラサ）
我が思る里や　勝て美らさ
（ワガウムルサトゥヤ　マサティチュラサ）

☆生徒作品　友情を詠む

転校するけど　笑顔でまた会う
この約束はね　変わらないよ

タケちゃん訳

転校やすしが　笑てまた逢ちやら
（テンコウヤスシガ　ワラティマタイチャラ）
結ぶ約束や　変わてなゆみ
（ムスィブヤクスィクヤ　カワテナユミ）

☆生徒作品　沖縄を詠む

清らかな海よ　でもその昔は
赤と黒だけの　地獄の世よ

タケちゃん訳

清らかな海よ　やしがその昔
（キユラカナウミユ　ヤシガスヌンカシ）
赤と黒だけの　闇の地獄
（アカトゥクルダキヌ　ヤミヌヂグク）

（ほ）

がじゅまる しんかぬちゃー

（生徒・学生のコーナーです）

「旅の報告会」より

珊瑚舎スコーレでは後期の初めに「旅の報告会」をします。夏休みに泊りがけでも泊りがけでなくても、短い時間でも構いません。自分が「旅」と考える外出をしてみるという時間をみんなで共有しています。今年もいろいろな「旅」がありました。何人かの「旅」を紹介します。

「鈍行列車に乗って」　　高等部　田中　旭

東京のおじいちゃんが亡くなりおばあちゃんが一人なのでいきました。四日ぐらいいました。帰り、僕は青春 18 きっぷを使って、どんこうで静岡まで行く予定だったのに、まさかの・・・期限切れで昨日まででした。だから行きは荻窪～東京～品川～熱海経由で快速、普通、快速と乗り継いで静岡まで行きました。翌日に大井川鉄道に乗りました。そして愛知県の家に帰りました。家族みんなに会えて嬉しかったです。楽しくいい夏休みでした。皆も楽しい夏休みでしたか。皆さんも静岡に行ってみてください。（どんこうで）

「自分」　　初等部　折尾　葵

夏休み、私はマレーシアのクアラルンプールで二週間英語の語学学校に通いました。最初は馴染めなくて最後は馴染めるだろうと思っていました。でも最後まで気づいたら私は下を向いていました。しゃべりもしませんでした。先生に質問されても頷く事しか出来ませんでした。友達もできませんでした。心の中で授業が終わるのをたんたんと待っていました。

時々これでいいのか？とか思う事もあったけど、その気持ちも押し殺しました。うまくコミュニケーションをとれない自分にイライラしました。そして二週間が終わりました。私の気持ちはまだマレーシアにいます。でも今回の旅で少しは成長したと思いました。

ふくぎのふぁー

（講師・スタッフのコーナーです）

「シンカソング」　　担当講師　　瓜田麻衣

こんにちは。今年度から木村華子さんと共にシンカソングの授業を担当している瓜田麻衣です。普段はマニョという名前でピアニスト、キーボディスト、シンガーソングライターとして演奏活動をしています。他には楽曲を提供したり、ピアノの先生もしています。子どもの頃から音楽がとっても好きで、人が何か表現しているのを見るのも大好きです。もともとはキーボディストを目指して大学ではジャズを専門に勉強しながら、色々なジャンルのバンドでキーボードの演奏をしてきました。3 年前に大好きな沖縄に移住してきてからは「風景が浮かぶピアノミュージック」をテーマに、オリジナルの曲をピアノで演奏することをメインに県内外で活動させてもらっています。

色々な場所へ行くのも好きで、去年はキャンピングカーで日本一周をしながら音楽の旅をしていました。結局半年かけて日本半周をして戻ってきたのですが、日本各地で見た美しい自然の景色や、人との

出会いは自分の世界を広げる良い経験になりました。

私は人前で表現する仕事を選んだ割には臆病だったり自信のない面もあるのですが、「やりたいことはできるし、やって良いんだな、世界は優しいな。だからもっとやってみよう！」旅の後にそんな事を考えていたと思います。

そんな中、今年の春に珊瑚舎スコーレと出会いました。生徒のみんなは一人一人個性が光っていて、毎週の授業でみんなに会えるのを楽しみに通わせてもらっています。今学期はハーリーの時に歌う応援歌の替え歌を作ったり、今は初の楽器の合奏にも挑戦しています。初等部から高等部まで集まれる時間で、どのような経験、学びを作っていくのか、まだまだ試行錯誤中ですが、みんなで歌や音を合わせた時に生まれるものを各々感じてもらいたいし、音楽を少しでも面白いな、楽しいなと感じてもらえるような授業を目指していきたいと思っています。

音楽は時代と共に現在も変化し続けているものです。沖縄には日本の中でも特に独特の音楽文化が根付いていますが、その中にもきっと変わっていくものと変わらないものがありますよね。ここ沖縄でのシンカソングの授業で、若いみなさんと過ごせる時間はとても貴重だなぁと思います。この時間の中から全く新しい表現が生まれるかもしれません。後期の授業も楽しみにしています！

子どもがんまり便り

「第二回　子どもがんまり」参加して

参加者　與座康仁（保護者）

皆さんこんにちは。去年から子どもがんまりに参加させてもらっている與座と申します。今回は７月２８日（日）にありました「パチンコ作ってパチンコ大会！ピザ作り」に参加した時のことをリポートさせてもらいます。そもそもパチンコと言えば冒険遊びの必須アイテムであり、ワンピースのウソップの強力な武器でもあります。私からすれば「**あの憧れのパチンコ**」なのであります。なので、息子以上にモチベーションの高い私。今回参加したのは父の私、息子のゆうた（8 歳）、娘のはるね（5 歳）、次男のあさひ（3 歳）の 4 人。講師の松田さんの指導の下、まずはパチンコの柄になるＹの字の枝を探します。それぞれお気に入りを探し出し余分な枝をカット。牛皮にゴムを付けてそれをＹ字の柄に針金で巻きつけて固定するのですが、そのバランスが意外と難しい。それぞれＹ字の柄に個性があり、上手く付けないと玉が柄に当たったりして真っすぐ飛ばない。何回か微調整しながらなんとかパチンコが完成しました。周りを見ると、すっごく大きいのから細いのまで、みんなそれぞれのパチンコを作っていました。みんな満足気の様子。それから、手作りピザを作ってパチンコ的当て大会。５ｍ～１０ｍ離れた的に当てたらシールが貰えるというから、もうみんな大盛り上がり。子ども達は６種のシールをコンプリートしようと何度も何度もチャレンジしていました。これがまたみんないい顔しているんだ。しかし、空き缶の的が超難しい。誰一人当てられないのかと思いきや・・・なんと！なんと！なんと！この私がその空き缶を射抜き、まさかの６種コンプリート!!やったー!!やったー!!と大喜び。子ども達を差し置いて誰よりも楽しんだ私なのでした。少し反省。途中、ウチのあさひがダダを捏ねて泣いた時、温かく声を掛けて下さった子どもがんまりのスタッフさん。そして、ウチの子ども達の面倒まで見てくれた参加者の親御さんの方々。ありがとうございます。子どもがんまりは、いつも温かい空気で満たされていて、そこに癒されているのは子どもだけではありません。そんな場所でこそ子ども達は、心も体も思いっきり伸ばしてすくすくと育っていくんだと思います。子どもがんまりのスタッフの方々、こんな素敵な場所を作ってくれて本当にありがとうございます。

沖縄だより

「まっすぐ飾らず」　　加藤愛子

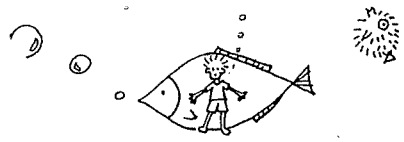
まにまに祭に初めて参加しました。驚いたのは、生徒の皆さんが皆、のびのびと肩肘張らずに発表の場に立たれていたことです。「失敗したら」とか「まちがえたら」とか、だれ一人思っていないように見えるのが、人一倍緊張するわたしから見ると実にふしぎでした。

出し物もよかったのですが、展示物のなかの子どもの権利のコーナー、そこにあったB4 用紙を半分に折った文章に心惹かれました。わたしは今、子どもの権利条約の勉強をしています。特に学校で子どもの権利を生かすにはどうしたらいいんだろう？と考えているところなので、どんぴしゃりのコーナーでした。まず読み始めて目に入ったのは「引っ込み思案」。このことば、今こそ頭の片隅に追いやられていますが、小学生だったとき、わたしの頭に兜のように覆いかぶさっていたことばです。わたしは学校に行くとおしゃべりのできない子どもでした。休み時間は校庭の隅に立って他の子が遊んでいるのをじっと見ていました。いじめられることも多かったのですが、親や先生に打ち明けることもできませんでした。そんなわたしがしたことは、「目立たないように」過ごすこと。亀が甲羅に頭をひっこめるように。結局卒業するまで、必要なときは口をきくけれど、ほとんど話さない「無口」な子で過ごしたのです。だれか話をするきっかけをつくってくれたらいいな、今日はその日になるといいなと願いながら。

そんなわけで展示された文章に非常に親しみを覚え、一気に読んでしまいました。先生が家に訪ねてきて「どうして学校に来られないの？」と聞かれて、ことばが出なくなるところ、重苦しい空気が漂うところなどは、身につまされる思いで読みました。ああよくわかるという気持ちでした。けれどこの文章の書き手さんは、その後「まわりが嫌といえる環境になればいい」と、思いの向きが外に向かうところがわたしとはちがいました。そしてその根拠が子どもの権利条約の「意見を表わす権利」と「子どもにもっとも良いことを」と「表現の自由」。わたしが当事者にいちばん伝えたいと思うことでした。そして当事者は今の「わたし」でもあることに気がつきました。なぜなら大人の心のうちにも「子ども」が生きつづけていると思うからです。これは他の人の権利ではない。わたしの権利でもある。そう思いました。なかなか口に出せない思いを文章で表現された書き手さんに敬意を表します。一晩悩んだ末にこうして文章で表現されたからこそ、読み手のわたしに新たな気づきが生まれたからです。本当にありがとう。

新春バトルのときは表現の「巧み」に驚かされましたが、今回はまっすぐ飾らず思いをぶつける生徒の皆さんに圧倒されました。まさか夏の盛りになんの変哲もないビルのなかで、こんな創造的な表現の会が催されているとは。だれも想像がつかないことでしょう。次もあるかな？と今からわくわくしています。

＊翻訳業。子どもの権利を中心に、女性の権利、国際人権法、あと学校で子どもの権利を生かす方法などを勉強中、その普及を考え中。あと図書館でおはなし会やっています。



新企画！ ポリプのゆくえ

珊瑚舎から旅立ったポリプの幼生達が、定着した先々で今どうしているのか。リレー形式で綴ってもらいます。

「新潟からこんにちは」　　廣田伸子

一期生の廣田と申します。珊瑚舎にお世話になったのは私が確か 17 歳の時。まだ初々しくいちごほっぺを輝かせていた時でした。「はい、ちゃんと覚えてるよ！」と言ってくれている関係者のお顔が目に浮かびます。ありがとうございます。その節は大変お世話になりました。当時私は行き先不明の人生という列車に乗り込んでたものの、どうして良いか分からず、本当に暗雲立ち込めるの状況の最中におりまして（あ、そういう意味では今も相変わらず似たような感じです）。そんな折に見つけたのが珊瑚舎

スコーレでした。新潟という寒い地域で育ったため、とにかく南に行きたい！という単純な理由から、いや、もちろんそれだけではありませんが、とにかくこの学校ならやっていけるかも！と思って選んだのがスコーレだったのです。あれからもう20年近くが過ぎ、私は36歳になりました。何をしているかというと、1年半前までは海外暮らしをしていたのですが、根無し草の生活に終止符を一旦打ち、まさかの大嫌いだった新潟の実家に戻って、暮らしております。

そう、「暮らす試み」に挑戦中です。私にとっての「暮らす試み」というのは、土をいじり、自分で野菜を作って、米作って、家作って！みたいな、少し極端なケースの「暮らす」ではありますが、イメージとしてあるんです。それは、この十日町の地域の爺ちゃん婆ちゃん達の「暮らし方」を見ながら、「あー。これが暮らすということか。」となんとなくしっくり腑に落ちたのがきっかけです。

実家に１年半前に帰ってあれこれ考えてると、あら？私そういえば自分の手と足で暮らしたことない！って思ったんです。暮らしたことないなんて、おかしな話ですが、だってみんな人間は暮らしているわけで、でも爺ちゃん婆ちゃん達（ちなみに、方言ではじさばさどもと言う乱暴な表現をします。沖縄はおじい、おばあと表現が柔らかいですよね。それともじーさん、ばーさんが訛ったのでしょうか。ごめんなさい、話がずれました）を見ていると、その自分の手と足で生活しているなと思うわけです。お金がなくても。

長くなりましたが、そこで私は畑や田んぼに関しては全く無知だし、何もまだできないけど、とりあえず実家で農家民宿を始めました。もともと、農家民宿は両親が20年くらい前に始めていたのですが、お客さんは年に数組み来れば良い方だったようです。そこで家の内装を変えてネットを使って宣伝した効果もあり、今では少しずつですがお客さんが増えつつあります。春には山菜採りや田植え体験、夏は川遊びや虫取り、秋には稲刈り、冬にはかまくら作りや雪山体験などが楽しめます。

23年ぶりに舞い戻ったまるで寅さん女版みたいなこの私が、大人になってからまるまる１年以上実家に住んだのは初めてのこと。初めてのことっていうのは、最初はイライラしたり、ドキドキしたりするものなんですね。でもなんだかんだ両親と喧嘩したりあーだこーだ言い合ったりしながら楽しくやれています。最後の親孝行と自分に言い聞かせて、もう少し新潟暮らしを続ける予定です。

皆様、是非新潟にお越しの際は農家民宿さんぜんへお越しくださいませ。そして、予約サイトではなく、直接お電話くださいな。

「農家民宿さんぜん」
住所　新潟県干溝壬78番地
TEL:025-761-3721
Email:noka_sanzen@gmail.com
Instagram: ＃noka_sanzen
Website: https://nokasanzen.wixsite.com/sanzen

また、自分の住む場所作りたくて、現在築150年の古民家を改修中です。お手伝いも大歓迎ですので、ご関心のある方は、お気軽にご連絡ください。Instagramはこちらです。＃house_taniproject

いまだに行き先不明の列車に乗っている感じは変わりませんが、ただただ新しい試みにドキドキしています。

特集！

『菜の花の沖縄日記』（ﾍｳﾚｰｶ出版）書評

前号でお知らせした卒業生の本が出版されました。出版に際し、書評を寄せていただいたのでご紹介いたします。

「１５歳の時、自分は何をしていたのか」と、この本「菜の花の沖縄日記」を読み終えた後、自身に問いかけ、ウチアタイ（恥ずかしくなって反省）したのは私だけではないだろう。

北国から、１５歳でひとり、沖縄へ。自分の望む学びを求めて、著者である坂本菜の花さんは珊瑚舎スコーレに進学することを選んだ。そして、全く知

らない土地を彼女は自分の足で歩き、たくさんの人と出会っていく。その出会いを通して感じたこと、考えたことを３年間綴った日記（北陸中日新聞に連載）が、この書である。彼女が紡ぐ素直で、真っ直ぐな言葉たちは、驚くほどストレートに胸に届く。

最初に私が心を揺さぶられたのは、２０１６年に県内で起きた米軍属による女性暴行殺害事件を受けて書かれた「なぜ、繰り返されるの？」。この中で彼女は、こう記している－「取り返しのつかない悲しいことが、また沖縄に起きてしまいました。本土では今回起こった事件がどう受け止められているのでしょうか。（辺野古への新基地建設に対する）抗議活動が大きくなる「恐れ」。最悪なタイミング。使われる言葉一つひとつが私の喉に刺さって抜けません」。

当時１６歳の菜の花さんが県外の読者に沖縄の現状を伝えたいと紡いだ言葉に涙がにじんだ。閉塞感漂う沖縄にあって、前を向いて声を上げる菜の花さんの存在は人々の“希望”になると思いドキュメンタリー番組の取材を依頼、菜の花さんとの共同作業が始まった。オスプレイが墜落した浜辺へ、新基地建設が進む辺野古へ…、菜の花さんが行きたいと望む場所へ向かった。行く先々で、彼女の澄み切った瞳を前に地元の人達が本音を話してくれた。

米軍ヘリが炎上した牧草地を所有する西銘さん夫妻を訪ねた時のこと、妻の美恵子さんは「父は、あのヘリに乗っていた米兵たちは大丈夫だったかねと、こればかり心配していた」と語った。この話を聴いた菜の花さんが綴ったのが以下の文章―「事故後、西銘さんは“ウチナーンチュ”だねと言われたという。出身、立場、知り合った時間に関係なく、同じ人間として見る。“ウチナーンチュ”にはそういう意味が込められていたのかな。そう思うとすぐ、それにつけ込んでいる私を含む“ヤマトンチュ（本土の人）”が現れる。ずっと潜在的に差別し虐げてきている現実が、事故のたびに浮かび上がる」。

これを読んだ時、胸が痛んだ。１０代の少女にこんなにも加害の意識を背負わせてしまっていることに、そして、ウチナーンチュとヤマトンチュという言葉を使わなければならない現実に…。沖縄と本土、本来なら線を引く言葉は使いたくない。けれど、伝えないと沖縄の人々の尊厳が傷つけられるところまできている、菜の花さんはそのことを肌で感じ、沖縄と本土との溝を埋めるために表現してくれたのだとの思いに至り、番組の核心部分としてお伝えすることにした。分断が進む社会にあって、この書には希望となる言葉が散りばめられている。沖縄のメディアに身を置いていると、時に無力感に苛まれることもあるが、そんな時に読み返して、また前を向きたいと思う。

閑話休題。冒頭で書いた「１５歳の時、何をしていたか？」という問い、私自身はお恥ずかしながら、ボーっと生きていました…。そんな自分でも優しく包み込んでくれた社会へ少しでも恩返しができるよう、今、菜の花さんの言葉のチカラをかりて沖縄の現状を伝えるべく「菜の花の沖縄日記」劇場版を制作中です。来年２月県内先行上映、４月から全国順次公開となります。ぜひ、銀幕の菜の花さんに会いに劇場にも足をお運びください！

沖縄テレビ　報道部　平良いずみ

★　★事務局便り　★　★

★　「ポリプのゆくえ」は珊瑚舎を巣立った人（関わった人）が今どんな生き方をしているのかを語ってもらいます。昼・夜の生徒、講師の方々など様々な人の今をお届したいと思っています。

★　★　★

●今年度(8月1日～9月30日)寄付・カンパを頂いた方々
石田みどり鹿糠文子坂本和子岡村健手塚賢至照本祥敬市野寿子当山幸江森口美千惠三浦幸子山田道子助川寿美子式部恵子丹羽雅代與儀勝子与那覇晴海湯本貴和上田秀一大城喜春北上田登久子盛口佳子真津昭夫家門収一長嶺由紀子橋川由美子小渡律子幸地江美子城間あずき松茂良米子名城悦子所扶久代石野裕子矢崎智章尾崎せき松田晴代萩原真美城間栄順村上呂理伊波雅子仲里博彦下地孝野村佳雄西山哲平智海竹内新辻口光生友寄和子山城千秋高橋泰子古堅苗泉恵子砂川明俊辰巳万里子坂本信一郎安田圭太郎宜野座智子中山きく志賀マサ子山縣尚武中山千枝子岡部勉」横山美保子近状健太長峰潤子山内陽子原田政美杉浦暁

発行者　：珊瑚舎スコーレ事務局　遠藤知子
住　所　：〒900-0022　那覇市樋川 1-28-1-3F
Tel　：098-836-9011　Fax：098-836-9070
Mail　：sango@nirai.ne.jp
URL　：http://www.sangosya.com